

# 「東」字ノート

——声符としての「東」字——

遠 藤 由 里 子

## 1. はじめに

漢字は形音義の三要素で構成されている。書写言語としての字形、音声言語としての字音、意味を示す字義であり、原則としてこの三要素全てが揃って始めて漢字が成立することになる。無論この三要素形音義は独立して存在しうるものではなく、互いに密接に関連しあって漢字は存在している。

漢字分類「六書」、即ち象形・指事・形声・会意・仮借・転注のうち形声文字にあっては、同一声符を持つ形声文字群は当然のことながら漢字の創成期においてはそれぞれの字音が同一か近似音であった。さらに、同一声符を共有する形声文字群の中には、字音だけでなく字義においても共通義を持つものが認められる。

例えば、声符「埶」を持つ漢字群「經：たていと」、「徑：こみち、近道」、「脛：すね」、「頸：くび」においては、「埶」は字音「ケイ」を示すとともに字義をも担っており、この漢字群の共通義は「まっすぐ」である。また声符「淺」を持つ漢字群「錢：ぜに」、「淺：あさい」、「箋：書き付け」、「賤：やすい」においては、「淺」は字音「セン」を示すとともに字義をも担い、その共通義は「ちいさい、すくない」である。このように字形・字音・字義は密接な関わりを持っている。<sup>(1)</sup>

本稿は字形の一部に「東」を持つ漢字において、「東」が担っているそれぞれの字音と字義について何らかの共通項を見いだすことができるか否か、その前提として最古の部首別字書『説文解字』<sup>(2)</sup>、及び『説文解字』の流れを汲む『玉篇』<sup>(3)</sup>から「東」字を偏旁に持つ漢字を取り出し、それぞれが持つ音と義を明らかにするための基本的作業である。

## 2. 『説文解字』所収字

漢字の形音義を考えると、六書説に基づいて漢字（小篆）の形体構造を分析して偏旁などの要素によって漢字を類別し、体系的な研究方法を確立した『説文解字』を第一に取り上げなければ

ばならないであろう。

『説文解字』では「東」字は木部に続く東部に親字（見出し字）として次のように説解されている。以下、所属部首名、通し番号（遠藤附）、親字、説解の順に示す。

東部 01 東 動なり、木に<sup>したが</sup>従う、官溥の説に、日の木の中に在るに従う、凡そ東の属は皆東に従う。(4)

また同じく東部所属字として「棘」が挙げられている。

東部 02 棘 二東、瞽は此に従う、闕。(5)

段玉裁注によれば、「二東」とは東を二つ並べた形状をいうのであり、『説文解字』は字義と字音の双方を欠き、徐鉉本<sup>(6)</sup>も反切を示していない、という。

東部所属字は以上の二字のみであるが、『説文解字』では「東」を偏旁の一部に持つ字として以下の11字が挙げられている。

支部 03 𨔵（陳+支）列なり、支に从い陳の聲。(7)

意符が「支」、声符が「陳」であり、「東」は当該字に於いては音・義ともに担っていない。

段玉裁によれば、本字は「𨔵」であるが、「陳」と同音であるところから後人が「陳」を「𨔵」に仮借してからのち、「陳」が通行するようになり「𨔵」は用いられなくなったという。

自部 04 陳 宛丘なり、舜の後、媯滿の封ぜられし所なり、自に从い木に従う甲の聲。(8)

日部 05 瞽 獄の兩曹なり、棘に従う、廷の東に在るなり、日に従う、事を治める者なり。(9)

段玉裁注によれば、「兩曹」とは今俗に言うところの原告と被告であり、「曹」とは類の如きものである。『史記』に曰く「吏を遣わし曹を分け逐捕す」と。『古文尚書』の「兩造具に備わる」及び『史記』は「兩造」を一に「兩遭」に作る。「兩遭」「兩造」は即ち「兩曹」。古字は多く仮借するのである。「曹」を引伸して「羣」「群」となす。「兩曹」は廷の東にあるため、二東の「棘」に従うという。

木部 06 棟 極なり、木に从い東の聲。(10)

人部 07 僮 終なり、人に从い曹の聲。(11)

衣部 08 襜 幘なり、衣に从い曹の聲。(12)

火部 09 燿 燾なり、火に从い瞽の聲。(13)

心部 10 僮 慮なり、心に从い曹の聲。(14)

水部 11 凍 凍水、発鳩山を出で（黄）河に入る、水に从い東の聲。(15)

冫部 12 𧇧 𧇧なり、𧇧に从い東の聲。(16)

段玉裁注によれば、初め「凝」を「𧇧」といい、「𧇧壯」を「凍」といい、水（の凍る）を「氷」といい、物（の凍る）を「凍」という。故に『礼記、月令』に曰く「水始めて氷り、地始めて凍る」と。また、「𧇧」は『説文解字』に「凍なり、水の氷（氷）るの形に象る」<sup>(17)</sup>とある。

虫部 13 蝮 蝮螭なり、虫に从い東の聲。(18)

以上 13 字が『説文解字』における「東」字および偏旁の一部に「東」を持つ字である。

### 3. 『玉篇』所収字

次に、『説文解字』から約 400 年後、梁の顧野王によって編纂された『玉篇』を取り上げる。『玉篇』は親字を小篆から隸書に換え、反切によって字音を示すなど、異なる点もあるが、ほぼ『説文解字』の編纂法を踏襲している。総親字数も『説文解字』の 9,353 字から 16,917 字へと増加しており、「東」を偏旁に持つ字も増えている。

「東」字及び偏旁の一部に「東」字を持つ漢字を以下に示す。上掲『説文解字』既出字と重複する字には\*を附す。

- 女部 14 媿、徳紅切、國名。<sup>(19)</sup>
- 見部 15 覩、多貢切、視るさま。<sup>(20)</sup>
- 口部 16 噍、丁動切、多言なり。<sup>(21)</sup>
- 手部 17 揀、都籠切、打なり。<sup>(22)</sup>
- 肉部 18 腠、都弄切、肉腠なり。<sup>(23)</sup>
- 心部 19 慄、徳紅切、愚なり。<sup>(24)</sup>
- 日部 \*05 瞽、昨勞切、輦なり、羣なり、説文曰、獄の兩瞽なり。<sup>(25)</sup>
- 彳部 20 徠、徳紅切、行くさま。<sup>(26)</sup>
- 木部 \*06 棟、都貢切、屋極なり。<sup>(27)</sup>
- 東部 \*01 東、徳紅切、春方なり。<sup>(28)</sup>
- 東部 \*02 棘、昨遭切、説文曰、二東なり。曹（字）は此に従う。<sup>(29)</sup>
- 支部 \*03 敝（陳+支）、徐珍・丈刃二切、列なり、また陳に作る。<sup>(30)</sup>
- 水部 \*11 漧、都驥切、露のさま。又水名、又都弄切。<sup>(31)</sup>
- 冫部 \*12 凍、都洞切、孟冬に地の始めて凍る、又音東。<sup>(32)</sup>
- 鬼部 21 魍、徳洪切、鬼の人を殺す。<sup>(33)</sup>
- 山部 22 嶮、得紅切、山名。<sup>(34)</sup>
- 阜部 \*04 陳、除珍切、列なり、布なり。或は敷・塵に作る。<sup>(35)</sup>
- 羊部 23 羴、都弄切、泰山に一角牛に似た獸有り。<sup>(36)</sup>
- 犬部 24 獫、得紅切、（義注なし）。<sup>(37)</sup>
- 鳥部 25 鶻、徳紅切、鶻の名。美形なり。<sup>(38)</sup>
- 魚部 26 鯪、徳紅切、魚名、鯉に似る。<sup>(39)</sup>
- 虫部 \*13 蝮、丁孔切、蝮蝮。<sup>(40)</sup>

以上 22 字が『玉篇』における「東」字および偏旁の一部に「東」を持つ字である。

#### 4. 字音

上掲 02 から 26 まで「東」を偏旁の一部に持つ 25 字のうち、06・11・12・13 は「東の声」すなわち字音は「トウ」である。『玉篇』所収字の 14・19・20・24・25・26 は「徳紅切」則ち字音は平声「東〜トウ」であり、また 21 の「徳洪切」の反切下字「洪」は「紅」と同音であるため、21 の字音も平声「東〜トウ」である。22 の「得紅切」の反切上字「得」は「徳」と同声母（端母）であるため、22 の字音も平声「東〜トウ」である。よって、06・11・12・13・14・19・20・21・22・24・25・26 の字音は平声「東〜トウ」である。

16 の「丁動切」と 17 の「都籠切」の反切上字「丁」・「都」は同声母（端母）、反切下字「動」・「籠」の韻母は等しい。よって 16 と 17 は同音であり、字音は上声「トウ」である。

15 の「多貢切」と 18・23「都弄切」は、反切上字「多」・「都」は同声母（端母）、反切下字「貢」・「弄」の韻母は等しい。よって 15・18・23 は同音であり、字音は去声「トウ」である。

09 は「𨔵の声」、よって 05「𨔵」と同音である。「𨔵」は『説文解字』では字音が不明であるが、『玉篇』反切は「昨勞切」、即ち平声「ソウ（サウ）」である。07・08・10 は「曹の声」、即ち平声「ソウ（サウ）」であり、05・09 と同音である。また、02 は『説文解字』では字音字義共に「闕」であるが、『玉篇』では「昨遭切」と字音が示されている。05 の反切「昨勞切」とは反切上字が同じ、反切下字「遭」・「勞」の韻母も等しい。よって 02・05・07・08・09・10 は平声「ソウ（サウ）」である。

03 は「陳の声」、よって 04「陳」と同音、即ち字音は平声または去声「チン」である。04「陳」は『説文解字』説解に「自に从い木に从う甲の聲」とあるように、より原型に近い小篆では意符「自」「木」に声符「甲」が組み合わさったものであるとすれば、小篆から隸書そして楷書へと書体に変化するに従い、声符「甲」が「東」となり、結果「陳」となったと考えられる。03「𨔵」も同様の経過を辿ったと考えられる。よって 03・04 の声符は本来「甲」であり、「東」とは認められないことになる。ここでは声符「東」を持つ対象字から外すこととする。

「東」字及び「東」字を偏旁の一部に持つ 23 字は平声「トウ」・上声「トウ」・去声「トウ」及び平声「ソウ（サウ）」の 2 つに分かれる。

#### 5. 字義

ここでは字音別に上記 23 字の字義を取り上げる。

まず、「東」字は、長い間『説文解字』の説解「動なり、木に从う、官溥の説に、日の木の中に在るに从う」と考えられてきたが、20 世紀初頭甲骨文字の出土、それ以後の甲骨文字の解読

により、次の徐仲舒の解釈が有力となっている。

東は古の橐<sup>トウ</sup>の字なり。『埤蒼』に曰く、「底無きを橐と曰い、底有るを囊と曰う」と。『蒼頡篇』に曰く、「橐は、囊の底無き者なり」と。物を囊中に実たし、其の両端を括る、囊の形はこれに象どる。橐は以て物を貯う。物は後世これを東西と謂う。東西なる者は橐の転音なり。<sup>(41)</sup>

つまり片端に底がある袋状のものを「囊」といい、「東」字の古形である「橐」は、物を収める筒状のものを指し、両端を縛った状態の象形が「囊」即ち「東」であるという。

残り 22 字を字音ごとに字義のみを取り出すと以下の通りである。

平声「トウ」字

- 06 棟 極なり。(『説文解字』)  
棟 屋極なり。(『玉篇』)
- 11 凍 凍水、発鳩山を出で(黄)河に入る。(『説文解字』)  
凍 露のさま。又水名。(『玉篇』)
- 12 凍 欠なり(『説文解字』)  
凍 孟冬に地の始めて凍る。(『玉篇』)
- 13 蝮 蝮蛇なり(『説文解字』)  
蝮 蝮蛇。(『玉篇』)
- 14 媿 國名。(『玉篇』)
- 19 棟 愚なり。(『玉篇』)
- 20 徠 行くさま。(『玉篇』)
- 21 魏 鬼の人を殺す。(『玉篇』)
- 22 嶺 山名。(『玉篇』)
- 24 獫 (義注なし)。(『玉篇』)
- 25 鶻 鶻の名。美形なり。(『玉篇』)
- 26 鯁 魚名、鯉に似る。(『玉篇』)

上声「トウ」字

- 16 棟 多言なり。(『玉篇』)
- 17 棟 打なり。(『玉篇』)

去声「トウ」字

- 15 覲 視るさま。(『玉篇』)
- 18 腴 肉腴なり。(『玉篇』)
- 23 羴 泰山に一角牛に似た獸有り。(『玉篇』)

字音「ソウ(サウ)」字

- 02 棘 二東、瞽は此に従う、闕。(『説文解字』)  
 棘 説文曰く、二東なり。曹(字)は此に従う。(『玉篇』)
- 05 瞽 獄の兩曹なり、棘に従う、廷の東に在るなり、日に従う、事を治める者なり。(『説文解字』)  
 瞽 輩なり、羣なり、説文曰く、獄の兩瞽なり。(『玉篇』)
- 07 轡 終なり。(『説文解字』)
- 08 轡 棧なり。(『説文解字』)
- 09 轡 蕪なり。(『説文解字』)
- 10 轡 慮なり。(『説文解字』)

先ず平声・上声・去声「トウ」音を持つ字は、17字中11・14・22・25・26の5字が国名・河名等を表す固有名詞である。「東」字及び残り12字の間には上に挙げた義注から見る限り共通義は認められない。

次に「ソウ(サウ)」音を持つ6字であるが、02「棘」の『玉篇』注に「曹(字)は此に従う」とある所から05「瞽」は「曹」の本字であることがわかる。「曹」とは『説文解字』説解によれば「廷にあって事を治める者」である。この6字にも共通義は認められない。『説文解字』には「曹」を声符に持つ字が十数例あるため、以降調査を進め、改めて上記02～10の字義との関連を考えた。

〔注〕

- (1) ここに示した「經、徑、脛、頸」、「錢、淺、箋、賤」は六書分類では形声文字に属するが、意味をも担っているところから会意形声文字とも称される。
- (2) 後漢・許慎(?-147頃)撰、100-121年頃成書。9,353字を540部に収めた部首別字書の嚆矢である。本稿では清・段玉裁撰『説文解字注』(經韻樓版)を使用した。
- (3) 梁・陳の間の人、顧野王撰、543年成書といわれる。顧野王著作の原本は夙に中国では散佚して、わずかに一部が日本に現存している。本稿では宋・陳彭年等による重修版『大廣益會玉篇』(澤存堂影印)を使用した。
- (4) 動也、从木、官溥説、从日在木中、凡東之屬皆从東。
- (5) 棘 二東、瞽从此、闕。
- (6) 棘 段玉裁注：二東、謂其形也、闕、謂義與音皆闕也、按説文舊本無音、鉉亦不著反語。  
 『説文解字』は南朝になると校訂や原本注に補足が加えられ、字音を反切で注記することが行われた。北宋初めの徐鉉は986年に校訂を行い併せて『唐韻』反切を各字に附した。この所謂『大徐本』30巻は以後『説文解字』標準テキストとなった。
- (7) 陳(陳+支) 列也、从支陳聲。  
 段玉裁注：～～此本陳列字、後人段借陳爲之、陳行而陳廢矣。
- (8) 陳 宛丘也、舜後媯滿之所封、从自从木甲聲。

- (9) 讐 獄罔曹也、从棘、在廷東也、从曰、治事者也。  
 段玉裁注：罔曹今俗所謂原告被告也、曹猶類也、史記曰遺吏分曹逐捕、古文尚書罔造具備、史記罔造一作罔遭、罔遭・罔造即罔曹、古字多假借也、曹之引伸爲羣也羣也。(以上「獄罔曹也」注) 罔曹在廷東、故从二東之棘、其制未聞也。(以上「从棘、在廷東也」注)
- (10) 棟 極也、从木東聲。
- (11) 僮 終也、从人曹聲。
- (12) 襜 幘也、从衣曹聲。
- (13) 燿 燾也、从火僮聲。
- (14) 僮 慮也、从心曹聲。
- (15) 凍 凍水、出發鳩山入河、从水東聲。
- (16) 凍 欠也、从欠東聲。  
 段玉裁注：初凝曰欠、欠壯曰凍、又於水曰冰、於他物曰凍、故月令曰、水始冰、地始凍。  
 『說文解字』欠、凍也、象水冰之形。
- (17) 冫部 欠 同上(冫)。 冫 鄙凌切、冬寒水結也。
- (18) 蝮 蝮蝮也、从虫東聲。
- (19) 婁、德紅切、國名。
- (20) 覲、多貢切、視兒。
- (21) 嘽、丁動切、多言也。
- (22) 揀、都籠切、打也。
- (23) 腓、都弄切、肉腓也。
- (24) 棟、德紅切、愚也。
- (25) 讐、昨勞切、羣也、羣也、說文曰、獄之兩讐也。
- (26) 徠、德紅切、行兒。
- (27) 棟、都貢切、屋極也。
- (28) 東、德紅切、春方也。
- (29) 棘、昨遭切、說文曰、二東也。曹从此。
- (30) (陳+支)、徐珍・丈刃二切、列也、亦作陳。
- (31) 凍、都蠶切、露兒。又水名、又都弄切。
- (32) 凍、都洞切、孟冬地始凍、又音東。
- (33) 魏、德洪切、鬼殺人也。
- (34) 嶽、得紅切、山名。
- (35) 陳、除珍切、列也、布也。或作敕塵。
- (36) 羴、都弄切、泰山有獸狀如牛一角。
- (37) 獫、得紅切。
- (38) 鶻、德紅切、鶻名、美形也。
- (39) 鯨、德紅切、魚名、似鯉。
- (40) 蝮、丁孔切、蝮蝮。
- (41) 李孝定『甲骨文字集積』(中央研究院歷史語言研究所專刊之五十)所収。